

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720012

研究課題名(和文)分析哲学の方法論の再検討に基づく新たなメタ形而上学の追究

研究課題名(英文) Pursuit of a novel meta-metaphysics based on reinterpretation of the methodology of analytic philosophy

研究代表者

小山 虎 (Koyama, Tora)

大阪大学・基礎工学研究科・特任助教

研究者番号：80600519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、概念分析を概念合成として捉え直すことで、分析哲学の主要な方法論とされる概念分析と、分析哲学の主流の立場とされる自然主義との間の緊張関係を解消する見通しが得られた。また、この見通しに基づく新たなメタ形而上学からの帰結として、様相実在論・時間論・Truthmaker理論のそれぞれについて概念合成を利用した新しい議論を展開することができた。さらに、学際研究を実施するための基盤として概念合成が有効であることを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：It is a major finding of this research project that the reinterpretation of conceptual analysis as conceptual synthesis yields a possibility for the removal of the tension between conceptual analysis and naturalism, both of which supposedly the standard analytic philosophers embrace. Another finding is that as the consequence of the removal, three novel arguments are advanced, respectively, of modal realism, temporal ontology, and the truthmaker theory. Additionally, it is also shown that conceptual synthesis is useful as the basis of interdisciplinary research.

研究分野：分析哲学、形而上学

キーワード：分析哲学 形而上学 メタ形而上学 概念分析 概念合成 学際研究

1. 研究開始当初の背景

初期の分析哲学は論理実証主義の反形而上学的傾向を引き継いでいたが、とりわけ可能世界意味論が有名になって以降、形而上学が分析哲学の一分野として確立され、「分析形而上学(analytic metaphysics)」として認知されるようになったことは周知の通りである。しかしその一方で、このことに批判的な分析哲学者も少なからずおり、分析哲学の本場である英米では、「分析形而上学は分析哲学という枠組みの中にどう位置づけられるべきなのか」という問題がさかんに研究されている。近年では両者のあいだの議論が活発化し、「メタ形而上学(metametaphysics)」という一分野を形成するに至っている。

その一方で、分析形而上学が位置づけられるべき分析哲学自体に関しては、近年大きな見直しが進んでいる。その主要な理由としては、分析哲学自体がある程度の歴史を積み重ねたことによって分析哲学史研究が充実しつつあること(たとえば2011年にはJournal for the History of Analytical Philosophyという雑誌が新たに公刊されている)と、実験哲学という新たな方法論の広まりにより伝統的な分析哲学の方法論である概念分析に大きな疑念が生じていることの二点が挙げられる。分析哲学観の見直しがメタ形而上学に影響を及ぼすことは明らかであるが、前述のようにメタ形而上学が分野としての形をなしてきたのがつい最近であるという事情のせいもあり、分析哲学観の見直しがメタ形而上学に及ぼす影響については、まだほとんど着手されていなかった。

2. 研究の目的

応募者のこれまでの研究により、概念分析を中心として分析哲学を捉えることから生じる問題がかなり深刻であるということと共に、「概念分析」の名で行われている活動は、むしろ新たな概念を構成しているものとして理解可能であることが分かってきた(応募者はこれを「概念合成」conceptual synthesis))と呼んでいる。

そこで本研究では、まず、最近の研究をサーベイすることにより、(i)分析哲学の方法論において概念分析がどのような役割を果たしているかを明らかにし、(ii)概念分析を「概念合成」として捉え直すことがどの程度正当化されるかを検討した。さらに、その成果を踏まえて、(iii)分析哲学の中心的な方法論を「概念合成」と捉えるとメタ形而上学にどのような影響が及ぶのかを明らかにし、最終的には、メタ形而上学上の新たな立場を確立することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、応募者がこれまでに構築したネットワークを活用し、国内外の研究者の協力を適宜仰ぎながら、以下の活動を実施した。

I. メタ形而上学の最新状況の調査

- II. 分析哲学の方法論における概念分析の役割の解明
- III. 概念分析を概念合成として捉え直すことの妥当性についての検討
- IV. 概念合成がメタ形而上学に及ぼす影響に関する検討

4. 研究成果

本研究によって得られた成果は、概念分析を概念合成として捉え直すことで、従来から指摘されてきた概念分析と、分析哲学の主流の立場とされる自然主義との関係に新たな見通しが得られたことである。一般的に、典型的な分析哲学者は、クワインに代表される自然主義(少なくとも、哲学と科学のある程度の連続性を認める立場)を受け入れ、かつ、概念分析を方法論とすると考えられているが、両者の間に緊張関係があることは以前から指摘されていた。それは主に以下の二点である。

- (1) 一般に自然主義者は、クワインに従い分析-総合の区別を受け入れないが、その場合、純粋な「概念分析」は不可能になるのではないか。
- (2) 概念分析は哲学独自の研究手法だとされているが、自然科学と哲学の連続性を受け入れる自然主義者にとって、哲学独自の方法論の余地はあるのか。

この問題点により、ある論者は、概念分析を実行不可能な方法論として、その正当性を否定する(これは、典型的には実験哲学者に見られる傾向である)。逆に、別の論者は、概念は自然科学では直接には扱えない研究対象であるとして自然主義を否定することにより、哲学独自の方法論として概念分析を受け入れる(こちらは、典型的には分析形而上学におけるアリストテレスの形而上学者に見られる傾向である)。このように両者は対立しているが、自然主義的な形而上学は不可能だとする点では一致している。

しかし、両者はいずれも、「概念」と呼ばれるものは客観的なものであり、人間が自由に左右できるものではないと仮定している。自然主義的な形而上学者がこうした「概念」概念を採用する必要はないことは指摘されているが、代替となる「概念」概念が具体的に提案されることはほとんどなく、「概念」を緩く捉えるか、「概念」概念の使用を止めることを提唱するというアプローチが多数であり、本研究のように概念合成(概念は人工物のように客観的でありかつ人間がある程度自由に左右できる)という発想を自覚的に採用している文献は見つからなかった(この見通しは発表[13]で概要を与えた)。

上記の成果を踏まえて、メタ形而上学にど

のような影響を及ぼすかについて、分析形而上学で論争されているいくつかの問題について検討を実施した結果、概念合成の観点から新たなメタ形而上学を展開することで、こうした論争を解消に導く可能性があることがわかった。具体的には下記の三つの問題に関しては、新たなアプローチができることがわかった。

(1) 様相実在論

デイヴィッド・ルイスが提唱した様相実在論はその悪名の高さにもかかわらず、決定的な反論を与えるのが難しいことが知られているが、「実在」概念について概念合成の観点から検討することにより、重大な問題点が指摘できることがわかった（これについては、発表[4][8][12]で論じた。また、論文を投稿準備中である）。

(2) 時間論

現在主義と永久主義の対立など、分析形而上学における時間論には様々な対立があるが、概念合成の観点から新たなメタ存在論を与えることにより、従来の対立を解消できる可能性があることがわかった（これについては、発表[1][9][10]で論じた。また、本成果を含む論文集を出版計画中である）。

(3) Truthmaker 理論

アリストテレスの形而上学者を始め、伝統的な形而上学的存在者を導入する根拠として、Truthmaker 理論（真理に存在論的基盤となる存在者があることを要求する立場）が用いられることがよくあるが、Truthmaker 理論の基本テーゼに対して概念合成の観点から検討することにより、Truthmaker 理論による正当化を無効化できる可能性があることがわかった（これについては、発表[2][14]で論じた。また、論文を投稿準備中である）。

さらに、概念分析を概念合成として捉え直すことの正当化として、自然主義にとって概念合成がどのような意義があるかを示すことが必要である。この考えに基づき、学際研究において概念合成を方法論として用いた研究を実施した。

具体的には、様々な分野で独立して研究が進められている「信頼」について、概念合成の観点から学際研究を実施した、加えて、そうした信頼に対する学際研究の基盤として「信頼」概念を概念合成することにより、複数の分野で実施されてきた信頼研究を統合する見通しが得られた（これについては、論文[1]および発表[7][11]において論じた）。また、こうした研究により、学際研究の方法論としての概念合成の有効性を示すことができた（これについては、発表[3][5][6]で論じた。また、本成果を含む論文集の出版を

計画中である）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- [1] Fabio Dalla Libera, Masashi Kasaki, Yuichiro Yoshikawa, and Tora Koyama, Trust and Artifacts, in J. Seibt et al (eds.), *Social Robots and the Future of Social Relations*, 査読なし, 2014, pp. 231-240, DOI: 0.3233/978-1-61499-480-0-231.

〔学会発表〕(計 14 件)

- [1] 小山 虎, 「分析哲学における時間論」, 日本科学哲学会第 48 回大会, 2015 年 11 月 22 日, 首都大学東京 (東京都八王子市)
- [2] Tora Koyama, Can the Domains of Quantification Serve As Truthmakers?, Australasian Association of Philosophy Conference 2015, July 7, 2015, Sydney (Australia).
- [3] 小山 虎, 「学際研究はどのように始まり、どのように進むのか」, 学際研究の原理, 2015 年 3 月 10 日, 京都大学 (京都府京都市)
- [4] Tora Koyama, Against Lewisian Modal Realism From a Metaontological Point of View, A Workshop on David Lewis's *On the Plurality of Worlds*, March 8, 2015, 京都大学 (京都府京都市)
- [5] 小山 虎, 「信頼の観点から見たロボットの安心と安全」, 第 32 回日本ロボット学会学術講演会, 2014 年 9 月 5 日, 九州産業大学 (福岡県福岡市)
- [6] Tora Koyama and Masashi Kasaki, Creating New Waves in Philosophy of Trust, the Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, August 28, 2014, 京都大学 (京都府京都市)
- [7] Fabio Dalla Libera, Masashi Kasaki, Yuichiro Yoshikawa, and Tora Koyama, Trust and Artifacts, Robo-Philosophy 2014, August 22, 2014, Aarhus (Denmark).
- [8] Tora Koyama, Against Lewisian Modal Realism From a Metaontological Point of View, CAPE Workshop on Meta-metaphysics, August 22, 2014, 京都大学 (京都府京都市)
- [9] Tora Koyama, A Mereological Metaontology for Temporal Ontology, A Frontier of Philosophy of Time, December 1, 2013, 京都大学 (京都府京都市)
- [10] 小山 虎, 「時間論上の存在論的対立に適

- したメタ存在論」, 日本科学哲学会第 46 回大会、2013 年 11 月 24 日、法政大学 (東京都千代田区)
- [11] 小山 虎、「心を持つロボットと安心されるロボット」, 第 31 回日本ロボット学会学術講演会、2013 年 9 月 4 日、首都大学東京 (東京都八王子市)
- [12] Tora Koyama, Against Lewisian Modal Realism From a Metaontological Point of View, the First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, September 9, 2012, Taipei (Taiwan).
- [13] 小山 虎、「実在するとはどういうことか:メタ形而上学研究から見えてくるもの」, 名古屋大学情報科学研究科多自由度コロキウム、2012 年 8 月 17 日、名古屋大学 (愛知県名古屋市)
- [14] 小山 虎、「Truthmaker としての出来事」, 三田哲学会主催シンポジウム「真理の形而上学——Truthmaker 概念を中心として——」, 2012 年 7 月 28 日、慶應義塾大学 (東京都港区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小山 虎 (KOYAMA, Tora)

大阪大学大学院基礎工学研究科特任助教

研究者番号: 80600519